

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	公益財団法人宗像ユリックス	
施 設 名	宗像総合市民センター	
助成対象活動名	公演事業	
内定額(総額)	14,577	(千円)
公演事業	14,577	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	BEYOND INSPIRED BY NEW YORK	2018年5月6日	出演者：中川英二郎、ジョゼフ・アレッシ、マーシャル・ギルクス、ブラント・アテマ	目標値	500
		ハーモニーホール		実績値	490
2	すくすくワンコインコンサート	2018年5月27日、9月2日、2019年3月2日	出演者：デュエットウ(ピアノデュオ)、中西久美(フルート)、原田哲男(チェロ)ほか	目標値	1,350
		ハーモニーホール		実績値	1,054
3	宗像ユリックス室内楽シリーズ「白石光隆室内楽シリーズ」ほか	2018年6月24日 2019年2月23日	出演者：白石光隆(ピアノ)、米元響子(ヴァイオリン)	目標値	950
		ハーモニーホール		実績値	618
4	子どものための音楽会「わくわく・ドキドキオーケストラ体験」ほか2事業	2018年7月22日、8月25日、2019年1月20日	出演：松村秀明(指揮)九州交響楽団(管弦楽)、九州管楽合奏団ほか	目標値	1,500
		ハーモニーホール		実績値	1,359
5	宗像ミアーレ音楽祭「九響と散策する名曲の小径、」ほか1公演	2018年9月29日、 月30日	出演：飯森範親(指揮)、九州交響楽団(管弦楽)、国府弘子(ピアノ)ほか	目標値	1,820
		ハーモニーホール		実績値	1,699
6	宗像ミアーレ音楽祭「吹奏楽団500人コンサート」ほか2公演	2018年9月29日・30日、 11月25日	出演：ブラックボトムブラスバンド、中学校・高校吹奏楽部生、市民吹奏楽団ほか	目標値	3,400
		ハーモニーホールほか		実績値	4,943
7	ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ	2019年1月12日	出演：ペーター・ゲート(指揮&ヴァイオリン)、ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ(管弦楽)他	目標値	550
		ハーモニーホール		実績値	461
8	砂と音楽の物語～サウンドアート&マリンバコンサート～	2019年3月9日	出演：emillenuett(サウンドアートパフォーマー)、GiLi(マリンバ&パーカッション)ほか	目標値	520
		ハーモニーホール		実績値	423
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	10,590
				実績値	11,047

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

宗像ユリックスが社会の機関として認知され、永続的に存続するために、常に社会を見つめ、社会課題解決に向けての取り組みを継続的に実施する必要があると考える。宗像ユリックスを取り巻く社会環境の中で、人口動態という将来の変化（人口減少）が最も大きな影響を及ぼすと想定される。人口減少社会に進んでいく中で、将来の宗像ユリックスを支える顧客の創造に取り組んでいく必要があることから、以下のミッションを掲げて事業を展開している。

ミッション：子育て・教育分野への継続的・体系的な事業展開による地域活性化と顧客の創造
具体的な取り組み：子どもの成長段階にあわせた事業展開「スマイルキッズプログラム」

【平成30年度の取り組み】

宗像ユリックスはすべての市民のための施設であることから、30年度は、子育て・教育分野への継続的・体系的な事業展開に加えて、他年代層を対象とした事業もバランスよく実施した。実施に当たっては、「質の高い実演芸術の創造・提供」、「地域の社会課題解決」、「吹奏楽の活性化」という目標に対して、しっかりとしたプロセスを踏みながら、予定通りに事業を進めた結果、ホールを支える顧客の創造につながり始めていると考える。

一例をあげると、未就園児とその保護者を対象とした「すくすくワンコインコンサート」では、1事業当たりの入場者数が前年に対して218%の伸びを示すなど、今後の継続的・発展的な取り組みを行うことで、更なる顧客の受容促進とそれによる他事業への波及効果などが想定され、継続顧客から支持者への育成につながり始めていると考える。

また、世界的なトロンボーン奏者4名による「BEYOND INSPIRED BY NEWYORK」では、九州各県からはもとより、広島県や神奈川県からの来場もあり、広域からの来場比率が64%（指標：40%）となった。無形の効果としては、「白石光隆室内楽シリーズ」や、「米元響子ヴァイオリンリサイタル」「ミアレ・ジュニア合唱団コンサート」「吹奏楽団500人コンサート」等では、当館スタッフが全国レベルで活躍している演奏者と企画立案段階から本公演までのプロセスでコミュニケーションを重ねたことで、共感をベースとした企画制作力を習得し、その必要性を再確認することができた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

【文化的意義】

地方において、子どもたちがプロの演奏者の生の音に触れる機会は都市圏と比較すると相対的に少ないといえる。子どもたちが社会を生きていくうえで必要となる感受性や想像力を育む機会を提供することは、劇場・音楽堂の責務であると考え。一例をあげると、622席のホールでのオーケストラ公演は、収益が低く開催が困難な状況であるが、助成を受けたことで短期的な経済効率のみを追求せずに、年2回の子ども向けのオーケストラ公演が可能となっている。また、子どもたちの成長段階にあわせた複数の事業展開が可能となっており、事業の連続性が生まれ、事業から事業へと顧客の循環が始まっており、ホールにとって貴重な資源である顧客創造に繋がりは始めていると考える。

【社会的意義】

人口の減少という社会環境の変化に加えて、子どもの6人に1人が貧困層に属しているという調査結果もあり、子育て支援策を地域でどのように実現していくのが問われる時代になっている。宗像ユリックスは、子どもの成長段階にあわせて、アウトリーチ・ワークショップ・ホールコンサートなどの子ども向け事業を継続的に実施することで、子どもに優しいまちづくりの実現に寄与するなどから、公共ホールとしての社会的な存在意義が示されていると考える。また、当館は、劇場・音楽堂の公共性を確保する為に、普及啓発事業を積極的に推進している。普及啓発事業によって地域や市民とつながりが生まれ、それが起点となって地域の文化環境づくりが促進されている。事例としては、アウトリーチ、ワークショップに加えて、「宗像ミアレ音楽祭」や「吹奏楽団500人コンサート」等が挙げられる。

【経済的意義】

30年度に助成を受けた8事業のうち、4事業で「交流人口増・市外からの来場比率40%」を指標として掲げ取り組んだ結果、最低値46%から最高値64%という結果となった。この視点を持ちながら事業を継続することで、ブランドが確立され、移住へ繋がるなどの地域の活性化に寄与できればと考えている。劇場法には、「地域コミュニティの創造と再生を通じて、地域の発展を支える機能」を劇場・音楽堂の役割のひとつとして挙げられている。現在、宗像ユリックスが取り組んでいる事業が地域の人々に認知され、文化はそれ自体を楽しむことに加えて、コミュニティの中で有用であるとの認識が得られるように取り組んでいきたい。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

① 目標に対する実績

【共通の目標値】		
入場者数(人)	入場者率(%)	収益率(%)
10,590	83.3	42.8

【共通の実績値】		
入場者数(人)	入場者率(%)	収益率(%)
11,047	86.9	30.3

入場者数・率はほぼ計画通り推移。収益率は目標を大きく下回る結果となった。収益率の低下は、収益構成が高い「宗像ミアーレ音楽祭」が、台風24号の接近により開催週前半から当日にかけてのチケット販売が伸び悩んだことが要因である。

② 指標に対する実績

No	事業名	指標	実績
1	BEYOND INSPIRED BY NEW YORK	交流人口増・市外来場比率40%	64%
		吹奏楽部生入場者数100人	89人
2	すくすくワンコインコンサート	交流人口増・市外来場比率40%	57%
		新規来場者数100人	211人
3	宗像ユリックス室内楽シリーズ 「白石光隆室内楽」ほか	交流人口増・市外来場比率40%	49%
		アウトリーチから本公演来場者50人	45人
4	子どものための音楽会	アウトリーチから本公演来場者300人	232人
5	宗像ミアーレ音楽祭 「九州交響楽団 & 岩崎宏美」ほか	交流人口増・市外来場比率40%	56%
		昨年度事業からの継続顧客200人	50人
6	ミアーレジュニア合唱団コンサート	合唱団参加者数	120人
	吹奏楽団500人コンサート	吹奏楽部生の増加210人(前年199人)	257人
	市民ステージ	市民ステージ参加70組400人	360人
7	ウーン・シュトラウスフェスティバル・ オーケストラ	交流人口増・市外来場比率40%	46%
8	砂と音楽の物語	6歳～8歳の入場者数150人	103人

指標として「交流人口増・市外来場比率40%」を掲げた5事業については、全事業で指標を上回る結果となった。特に、「BEYOND INSPIRED BY NEW YORK」については、吹奏楽関連団体への告知を拡げた結果、九州全域、広島県などの来場者が見られた。開催2年目となる「すくすくワンコインコンサート」についても、前年比218%の伸びを示している。この事業は当館の子供向け事業の起点となるものであり、今後の他事業への波及効果も期待できる。「吹奏楽団500人コンサート」は、市内の中学校吹奏楽部全校に加えて、社会人演奏家も参加し、積極的な交流が見られるなど、吹奏楽を通じた地域の活性化に繋がっている。その他事業についても、計画通りにプロセスを重視した取り組みができています。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【事業番号1・・・「BEYOND INSPIRED BY NEW YORK」】

4月7日・・・中川英二郎による宗像高校吹奏楽部でのクリニック

5月6日・・・「BEYOND INSPIRED BY NEW YORK」公演

事業期間は計画通りに進捗。事業費についてもほぼ計画値となった。

【事業番号2・・・「すすくワンコインコンサート」】

5月27日・・・ピアノ連弾、9月2日・・・木管五重奏、3月2日・・・ピアノ、チェロ、フルート

事業期間は計画通りに進捗。事業費についてもほぼ計画値となった。

【事業番号3・・・宗像ユリックス室内楽シリーズ】

4月27日、5月18日、5月19日、5月20日・・・白石光隆アウトリーチ8回(小学校ほか)

4月28日・・・白石光隆音楽講座

6月24日・・・「白石光隆室内楽シリーズ」公演

12月1日・・・米元響子・菊池洋子音楽講座(2回)

12月2日・・・米元響子・菊池洋子アウトリーチ(2回)

2月23日・・・「米元響子ヴァイオリンリサイタル」公演

事業期間は計画通りに進捗。事業費は計画通りであったが収入が伸び悩んだことがあり、事業収支に課題が残る。アウトリーチ・音楽講座も実施しているため収益率は低いが、継続的に取り組むことで収支改善は可能であると考え。

【事業番号4・・・子どものための音楽会】

7月22日・・・「わくわく・ドキドキオーケストラ体験」公演

8月25日・・・「九管ポップスファミリーコンサート」公演

1月20日・・・「わくわく・ドキドキオーケストラと遊ぼう」公演

1月20日・・・「阪田知樹ミニコンサート」

事業期間は計画通りに進捗。事業費は計画値となったが、子ども向けオーケストラ公演である為収益率は低いが、認知度を高めることで広告宣伝費の低減化などを進めていく必要がある。

【事業番号5・・・宗像ミアーレ音楽祭「九州交響楽団&岩崎宏美」ほか】

9月29日・・・「九州交響楽団&岩崎宏美」公演

9月29日・・・「国府弘子 親子で楽しむジャズライブ～Smile kids jazz～」

9月30日・・・「国府弘子スペシャルトリオWITH藤原道山」

事業期間は計画通りに進捗。事業費については音響・照明などの舞台費が当初見積もりを上回った為、計画値を超えた。収入については台風24号の接近で開催週の収入が伸びなかった。

【事業番号6・・・宗像ミアーレ音楽祭「ミアーレ・ジュニア合唱団」ほか】

8月26日・・・アルケミストミニコンサート

9月29日・・・「ミアーレ・ジュニア合唱団コンサート」公演、「市民ステージ」公演

11月25日・・・「吹奏楽団500人コンサート」

事業期間は計画通りに進捗。事業費についてはほぼ計画値となった。市民参加型事業の為、収益率は低いが、約1,000人の市民が参加したことを考慮すると、事業費は適切であると考え。但し、演奏料をはじめとした経費の低減化や収入増に取り組んでいく。

【事業番号7・・・ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ】

1月12日・・・「ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ」公演

事業期間は計画通りに進捗。事業費については広告宣伝費増により事業費は計画値を上回った。ニューイヤーコンサートとして2年目であり、認知度が低いために広告費増となったが、顧客の評価は高く、継続することで広告宣伝費の低減化は可能と考える。招聘物の公演であり、渡航費や国内交通費が負担となり、収益率は低いが新年の恒例事業として定着を図っていく。

【事業番号8・・・砂と音楽の物語～サンドアート&マリンバコンサート】

3月9日・・・「砂と音楽の物語～サンドアート&マリンバコンサート」公演

事業期間は計画通りに進捗。事業費についてもほぼ計画値となった。

全8事業を24日間で計画通りに実施した。事業費については事業番号5「九州交響楽団&岩崎宏美」、事業番号7「ウィーン・シュトラウス・フェスティバル・オーケストラ」で支出超過となったが、それ以外の事業については、ほぼ計画値で推移した。しかしながら、収益率の低い事業があることから、収入増の工夫と無駄な経費の削減に取り組む必要がある。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

(1) ミッション

- 宗像ユリックスのミッション：子育て・教育分野への継続的・体系的な事業展開による地域活性化と顧客の創造
- 具体的な取り組み：子どもたちの成長段階にあわせた事業展開(スマイルキッズプログラム)

人口動態という将来の変化や文化芸術鑑賞への参加率の低下という社会環境に加えて、子どもの貧困率が社会問題化している。また、共働き世帯の増加などにより、親が子どもと真剣に向き合えない時代になり始めていると感じる。この親子間のコミュニケーションのあり方が起点となった「ネグレクト」や「マルトリートメント」等が社会問題化している。以上のことから、子育て支援策を地域でどの様に実現していくかが問われるという時代認識から、子どもに優しいまちづくりに向けた取り組みとして、アウトリーチ・ワークショップ・ホールコンサートからなる子ども向け事業を体系的に組み立てた「スマイルキッズプログラム」を実施している。

そして、この事業を長期的な視点を持って取り組むことで、公共ホールの使命を果たすとともに顧客の受容促進とブランディングにつなげていきたいと考える。

「スマイルキッズプログラム」の起点となる事業「すくすくコンサート」は毎月1回、地域のコミュニティセンターで開催しており、毎回40組の定員が満席となるなど定着している。その発展形として29年度よりスタートした「すくすくワンコインコンサート」は、平成30年度は200%を超える伸びを示しており、今後継続的に実施することで当館を支持・支援する顧客の創造につながり始めている。この事業の顧客層は、未就園児とその母親が中心となっており、事業開始前には、ほとんどホールを利用していない層であり、当館にとって将来の貴重な経営資源といえる。もちろん、当館はすべての市民のための施設であることから、他年代層への事業についてもバランスよく実施している。

(2) 音楽監督の配置

平成25年4月より「宗像ミアーレ音楽祭」の音楽監督として今村晃(東京都交響楽団音楽主幹、九州交響楽団音楽主幹を歴任、平成25年12月に文化庁長官表彰)を起用した事業展開を行っている。25年度から、子ども向けのオーケストラ公演(年2回)、一般向けのオーケストラ公演(年1回)、アウトリーチ(年6回)などを計画的に実施し、オーケストラ公演を支える顧客の育成に取り組んでいる。音楽監督を配置し、企画立案段階から当館スタッフとのコミュニケーションを重ねていることから、知識の習得に伴う企画立案能力の向上が図られている。

(3) 提携団体

当館は、九州で唯一のプロ吹奏楽団「九州管楽合奏団」と平成18年に連携協力に関する提携を結んでいる。具体的には、年1回のホールコンサート、市内幼稚園・保育園全園でのアウトリーチを実施している。

その強みを活かして、当館は吹奏楽を地域の貴重な文化資源として捉え、その活性化を目的に関連事業を積み上げてきた。具体的には、市内の小学校3年生から6年生を公募して設立したユリックスジュニアプラス(平成26年設立、金管バンド、30年度団員数34名)や音楽祭では吹奏楽団500人コンサート等を実施し、その際の指導者として楽団員を派遣するなど吹奏楽の活性化に寄与している。

(4) 公演内容の新規性

「砂と音楽の物語～サンドアート&マリンバコンサート」を開催した。本事業では、砂絵が物語の様に次々と展開する「サンドアートパフォーマンス」と、それを柔らかく包み込むマリンバの音色を融合させた新事業によるアプローチを子ども向けに実施し実演芸術がもつ楽しさ・素晴らしさを伝えた。30年度で3回目の実施となり、ストーリー性の追加やバトントワラーによる動きの表現を取り入れるなどの工夫を加えて、聴衆の期待感を大きく超える公演内容とした。

本事業を企画立案するに当たっては、新たな子ども向け事業を顧客に受け入れてもらうことを念頭に置きながら、演奏者とコミュニケーションを重ね、今財団ができる音楽事業と新たなジャンルであるサンドアートを融合させた。結果として、顧客から高い評価を得ることができ、ニーズをくみ取る共感力とプロセスの重要性の再認識につながった。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

(1) 吹奏楽活性化

当財団は、吹奏楽を地域の貴重な文化資源として捉え、その活性化を目的に関連事業を積み上げてきた。具体的には、市内小学校3年生から6年生を公募して設立したユリックスジュニアブラス（平成26年、30年度団員数34名）や、吹奏楽団500人コンサートを開催している。吹奏楽団500人コンサートでは、中学校・高校の吹奏楽部生全員参加に加えて、ユリックスジュニアブラス、アマチュア演奏家、プロの演奏家、総勢500人が合奏するという、吹奏楽愛好家にとって貴重な機会となるとともに、演奏者間の交流が活発になり、活性化に向けた機運が高まっている。次年度からは、九州で唯一のプロの吹奏楽団である九州管楽合奏団と連携協力関係にあるという強みを活かして、「奏法指導・合奏指導」、「アンサンブルコンテスト」、「吹奏楽コンクール課題曲コンサート」等の新たな事業を加え、吹奏楽活性化に向けた一連の流れをつくり、学生、学校、地域、そしてホールのそれぞれにメリットが生まれる活動として取り組む。

(2) 普及啓発事業の取り組みによる社会性・公共性の確保

公共ホールのあり方は時代と共に変遷し、現代では「芸術性」だけでなく、「社会性」が求められている。特に地方に存立する場合は、より「社会性」に軸足を置いた事業展開が必要であると考えられる。

当財団は、普及啓発事業を積極的に実施することで公共性を確保しようとしている。当財団の最も大切なステークホルダーは、市民である。アウトリーチをはじめとした普及啓発事業を継続的に実施し、市民とのつながりをもつことで公共ホールとしての社会性と存在意義を示したいと考えている。コンサートを開催するだけでは市民に対して、当財団のミッションは伝わらない。平成30年度に助成を受けた「宗像ユリックス室内楽シリーズ」では、小学校や福祉施設、コミュニティセンターなどで10回のアウトリーチと4回のワークショップを開催した。今回起用した白石光隆(pf)と米元響子(vl)は、当財団スタッフと数年来アウトリーチ事業などを実施しており、演奏力に加えて地域特性を熟知し、当財団の活動に理解を示し顧客に対しても積極的に歩み寄ることができるアーティストである。このようなアーティストによる普及啓発活動を実施することは、受け手側にとって貴重な体験となり、実演芸術に対する理解とその必要性に対する認識も生まれると考える。今回のコンサートの入場者の中で45人がアウトリーチに参加している。当財団の30年度のアウトリーチは87回実施し、11,374人にプロの演奏家による生の音をお届けした。人口96,000人のまちの約12%がアウトリーチ事業に参加したことになり、音楽をツールとしたホールと市民の関係性がスタートしている。

(3) 芸術性の確保のためのプロセスへの投資

普及啓発事業を積極的に取り組む一方で、高い芸術性の確保についても時間をかけて取り組んでいる。地方に存立する公共ホールが高い芸術性を確保するためには、周辺での実演芸術家・団体が都市圏と比較すると希薄である事、また、都市圏から実演芸術家・団体を招くと旅費や宿泊費が公演開催の上で負担となるなどの不利な要因がある。しかしながら、置かれた環境に左右されずに高い芸術性を確保し、鑑賞機会を提供することは公共ホールの責務であると考えて事業を展開している。具体的には、地域に存立するトップレベルの実演芸術家・団体との連携であり、九州交響楽団や九州管楽合奏団とは情報を共有し、試行錯誤を重ねながら地域での事業を推進していることが挙げられる。2点目は、上記の普及啓発事業で示した当財団の活動に理解を示し、顧客に積極的に歩み寄ることができるアーティストと公演事業と普及啓発事業を実施している。収入が少ない普及啓発事業を加えることで、収益性は著しく悪化するが、プロセスに投資しながら、組織の目的である顧客の創造につなげる取り組みを行っている。

事業例として、「BEYOND INSPIRED BY NEW YORK」や「白石光隆室内楽シリーズ」、「米元響子ヴァイオリンリサイタル」等が挙げられる。

(4) 「すくすくコンサート」を起点とした「スマイルキッズプログラム」

子育て環境にあることから様々な悩みを抱え、社会参加においても制約の多い未就園児とその母親を対象とした「すくすくコンサート」を、各地区のコミュニティ・センターで毎月開催し、好評である。このコンサートは生の音楽を届ける場としてだけでなく、同じ境遇の母親がつながる場所となっており、貴重な社会参加の場となっている。これを起点として、「すくすくワンコインコンサート」をはじめとした子どもの成長段階にあわせた様々な事業を展開している。一連の業に多くのファミリー層が参加し、母親の社会参加や親子間のコミュニケーションの重要性を認識することで、社会課題解決につなげたい。併せて、多くのファミリー層が「スマイルキッズプログラム」に参加し、経験価値を高めることで、当財団に共感と信頼を寄せる顧客の創造につながると考える。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

(1) 組織体制確保に向けた取り組み

「現代社会において、組織こそ、一人ひとりの人間にとって、生活の糧、社会的な地位、コミュニティとの絆を手にし、自己実現を図る手段である。当然、働くことが重要な意味をもつ」とP.ドラッカーは述べており、人材育成確保にあたり、参考にしたい。

今後の社会環境を推測すると、価値観の多様化による人材の流動化が考えられ、組織が期待する人材をつなぎとめ、公共ホールとしての社会的役割を果たしていくためには、スタッフの能力開発をしていく仕組みが必要と考えられる。

近年の具体的な取り組みとして、平成28年度に嘱託職員の雇用年限5年を撤廃し、任期の定めがない職員としたことで、文化事業に携わる職員7人のうち6人が任期の定めがない常勤職員となった。

(2) 研修制度

公益社団法人全国公立文化施設協会が主催する全国劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会や（一財）地域創造が主催する地域創造フェスティバルに毎年職員を派遣している。

また、不定期で開催されるシンポジウムなどについても、不定期ではあるが必要に応じて参加している。

(3) 劇場・音楽堂等間のネットワーク形成

以下、近年のネットワーク形成による事業例を示す。

平成27年度・・・（一財）地域創造地域の文化・芸術活動助成事業（連携プログラム）において、全国4館連携の幹事館として、「狂言風オペラ モーツァルト“コシ・ファン・トゥッテ（管楽八重奏版）”」を実施した。

平成28年度・・・文化庁「劇場・音楽堂等活性化事業」（劇場・音楽堂等間ネットワーク構築支援事業）において、兵庫県立芸術文化センターが主催する、「花形狂言2017冬の大ツアー」に参加した。

平成30年度・・・公益財団法人筑後市文化振興公社サザンクス筑後で、当財団が企画した九州管楽合奏団（九州で唯一のプロ吹奏楽団、当財団と連携協力に関する提携書を締結）のアウトリーチ及びホール公演を実施。令和元年度も実施予定。

令和元年度・・・公益財団法人アクロス福岡との連携で、「アクロス弦楽合奏団 宗像公演」の開催が決定。

(4) 安定的な収益基盤

別表で指定管理料の推移などを示す。

(5) 財政支援者及びその金額

別表で示す。